海外研究発表報告 ―イギリスにおける発表と学び

A Report on Overseas Research Experience-Presentation and Learning in England

朝日大学保健医療学部看護学科　田島真智子

Ⅰ．はじめに

Networking for Education in Healthcare（以下，NETと略す）は，学習とコミュニケーションの向上，また教育方法や学習資料開発の探求を図る事を目的として，1989年に設立された．NETは国家的および国際的な会議，1年に2～3回の会報の発行，またワークショップやオープンスペースイベントを組織し，人的，知的交流活動の推進等を行っている．そして毎年定期的に国際的な広い範囲で医療教育の最新のアイディアや経験等を共有するために国際会議が開かれている．今回この国際会議に参加させて頂く機会を得たため，その経験と学びを報告する．

Ⅱ．初めてのイギリス

今回のNETは2014年9月2日～4日の期間，イギリスのケンブリッジ大学で行われた．この時期，日本は残暑厳しく気温30度を越える日が続いていたが，日中のケンブリッジの気温は20度前後であった．しかし朝晩の気温は10度前後であり，日中との差が激しい為か，周囲の人の服装は半袖の人からダウンジャケットを羽織っている人など様々であった．私も常に暖かい上着を持ち歩く必要があり，国による気候の違いを肌で感じた．

国際会議出発前に「ケンブリッジ大学」の場所を知るために，調べ始めてわかった事があった．ケンブリッジ大学という建物はなく，街中に点在する31のカレッジと学部といわれるいくつもの建物を総称してケンブリッジ大学という．カレッジというのは寮であり，それぞれ数百名の学部生が所属し寝食を共にするのだそうだ．そしてこの国際会議が行われたのは31あるカレッジのひとつ，チャーチルカレッジであった．

ケンブリッジ中心街からチャーチルカレッジへはバスが便利であるという事前情報を基に，バスターミナルまではスムーズにたどり着くことができた．しかしそこから先は私にとって簡単ではなかった．表記は全て英語なのはもちろんであるが，日本の様に詳細な路線地図はなく，しかも私の英会話力は全くあてにならない．意を決し話しかけてみたが，私も，私に尋ねられた相手の方も意思疎通を図る事ができず不完全燃焼のまま会話が終わってしまった．バスで向かうのを諦め，予定を変更してタクシー乗り場まで歩いたが，ガ

写真１　ケンブリッジ中心街にあった建物

写真２　チャーチルカレッジ正面

イドブックに「ミニキャブ注意」とあったのを思い出した．しかしどれがミニキャブなのかわからない．乗車する勇気が持てずバスターミナルとタクシー乗り場の間を 30 分程右往左往したが，結局ミニキャブかタクシーか，わからないまま乗車し，10 分程でチャーチルカレッジに到着した．料金が正当かどうかは判断できなかったが，驚くほどの金額ではなかったので，ひとまず安堵した．しかし違うルートであれば徒歩 10 分程であったと後から知り，海外では国内以上の事前準備が必要であることを学んだ．

Ⅲ．国際会議

写真３　寮の中庭

写真４　寮の部屋

写真５　ポスターの前で

レンガ造りのチャーチルカレッジは設立 55 年であるが，色褪せた感じがしない，重厚感の漂う建物であった．カレッジ内に入ると，コーヒーブレイクのために人があちらこちらからラウンジに集まってきた. 午前と午後 1 回ずつコーヒーブレイクがあり，その時にはコーヒー，紅茶はもちろんの事，ビスケットやフルーツ，ケーキなどがずらりとテーブルに並び，ちょっとした立食パーティーのようであった．日本でこのような光景をあまり目にしたことはなかったが，参加者は和やかな雰囲気での会話であったため，日本の学会でも取り入れると良いのにと感じた．

国際会議 3 日間を通して，基調講演と「臨床診療における教育と実践の開発」,「教育改革と強化」,「リーダーシップ開発」,「学習と指導の戦略」等のテーマセッションが 96 題目,「効果的な感情の学習」,「教室での学習を変換するための複数のアプローチ」等のシンポジウムが 4 題目，ポスター発表の 50 題目が発表された．シンポジウムやセッションでは活発な，また時々笑いのある和やかな雰囲気の中でディスカッションが行われていた．参加している方々の名札を見ると，イギリス，中国，アメリカ，ニュージーランド等，様々な国の方が参加していた．その中でも私と顔のつくりが似ている中国の方に親近感を抱いたが，その方が質疑応答の際に流暢な英語で回答している姿を見て，親近感を抱いた自分が恥ずかしくなった．英語はできないより，できた方がいい，とわかっていたことであるが再認識した．

国際会議参加者との交流は夜まで続いた．シンポジウムやセッションは行われていなかったが，展示されているポスターの前でワインを飲みながら談議している方が何名かいた．私のポスターを見ている女性がいたため，勇気を振り絞り話しかけてみた．

「Did you have an interest in this poster ?」

もしかしたら参加者と話せる機会があるのではないかと，国際会議に参加する前に練習していた言葉である．

私の言葉に，その女性はすぐに返事をしてくれたが，単語しか聞き取ることができなかった．その聞き取りに自信はないが，私の認識では「interesting」や「agree」という言葉であった．女性の話した内容を全て理解する事はできなかったが，私の研究に興味を示してくれたと感じた．この出来事を忘れず，研究へのモチベーション向上に繋げたい．

Ⅳ．研究の紹介

Resilience studies with nursing students in Japan
～ Reinforcement method of the repulsion by the nursing education~

Grotberg(2003) described resilience as “adaptability of a person in adversity, in order to overcome problems and to be strengthened, or changed through the experience.” For nursing students, nursing practicums and the national nursing examination are regarded as adversities and resilience is required to overcome these events. This study focused on resilience studies conducted with nursing students and investigated ways of increasing resilience in nursing education. Furthermore, the number of resilience studies in Japan was compared with those conducted internationally. In February 2013, using “ICHUSHI Web Ver.5” and “PubMed,” using the keyword, “resilience,” a search was conducted for abstracts. The results indicated 169 abstracts in “ICHUSHI” and 6735 items in “PubMed.” When “nursing student” was added as a keyword, there were 7 items in “ICHUSHI” and 40 items in “PubMed”. Among the 7 items in “ICHUSHI,” three papers referred to ways of increasing resilience as follows：emotional control and health management during nursing practice and strengthening human relationships, raising self-evaluation during practice, and accumulating experience through practice and constructing human relationships. It was indicated that resilience of nursing students was highly affected by nursing practice. It is suggested that future studies should discuss educational methods for producing multiple effects from the nursing practice. Teachers should help students build good relationships with on-site trainers and patients, and carefully consider grouping in the practice, so that group dynamics would become effective. Furthermore, it would be necessary to examine resilience studies conducted in other countries and in school education, in addition to studies conducted in Japanese nursing education.

私はこの国際学会で「看護学生を対象とした我が国と海外のレジリエンス研究の文献検討～看護教育でレジリエンスを強化するには～」を題にポスター発表を行った．

Grotberg(2003) はレジリエンスを，逆境に直面した時にそれを克服し，その経験によって強化される場合や変容される人が持つ適応力であると表現している．看護学生には看護学実習や国家資格受験などの多くの逆境がある．私はこれらを乗り越え適応していくレジリエンスという力が看護学生には求められると考え，レジリエンス研究に興味を持った．そこで日本と海外の看護教育でのレジリエンス強化方法を探求した．

日本のその内容は，小林ら（2012）によると「実習中の感情調整と健康管理，人とのつながりの強化がレジリエンスを育むことに繋がる」や，齋藤（2012）は「看護学実習や人間関係との相互作用がレジリエンス強化に関係している」とし，川上ら（2011）は「実習において学生の自己評価を高める，教員や病院スタッフの関わりがレジリエンス強化に影響を与える」事を明らかにしている．諸外国のその内容は Thomas ら（2012）によると「実習中の積極的な経験はレジリエンス強化に良い循環をもたらす」とし，Chen ら（2011）は「小さなグループで問題を解決する事がレジリエンスを強化する」事を明らかにしている．

写真６　ポスター発表の様子

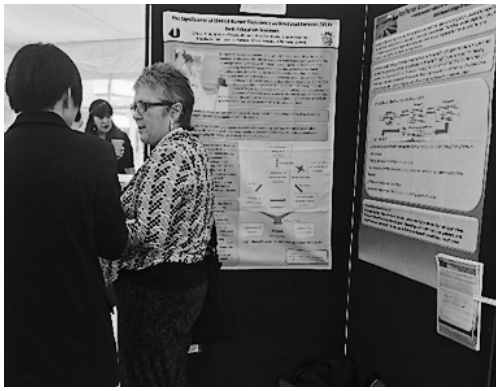
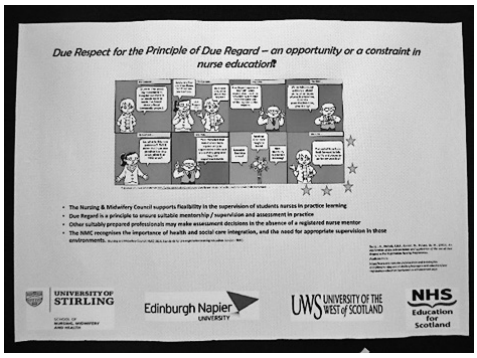


写真７　質疑応答の様子

写真８　フリードリンクの「チャーチルカレッジ」ロゴ入り炭酸水

このように看護学生のレジリエンスには実習が大きく影響することが明らかになった．今後の研究課題として，レジリエンスを高める実習の場において相乗効果を得られるような教育方法を検討する必要性が示唆された．看護教員は学生と臨地実習指導者や患者が良好な関係性がとれるよう援助することや，実習においてグループダイナミクスが存分に発揮できるよう，実習のグループ決めも慎重に行う必要があると考える．

我が校の学生は基礎看護学実習Ｉを終えたばかりである．この初めての実習ではそれぞれの学生が様々な思いを描いて臨んだ実習であったと考える．学生の中には，この４年間を乗り越えられるだろうかと心配する者もいた．しかしひとつの実習だけで判断するのではなく，私たち教員や実習指導者との関わりの中で学生のレジリエンスを育み，全員揃って卒業できるようサポートしたい．強くしなやかな看護師に育てる事を目標に今後もこの研究に取り組み続けようと考える．



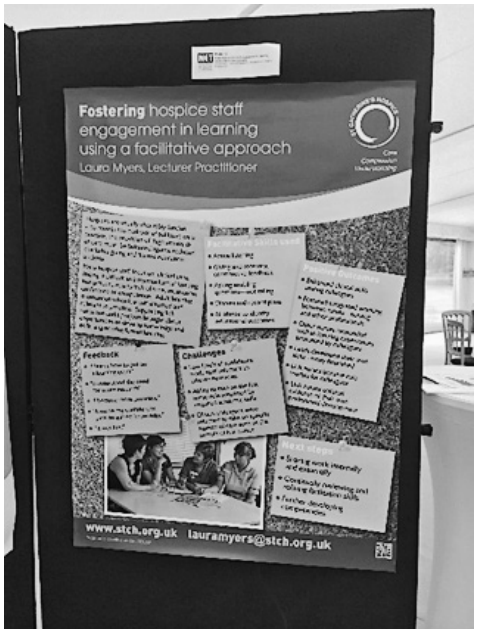


写真９，１０　他の参加者のポスター

Ⅴ．おわりに

今回，初めて国際会議に参加させて頂く機会を得た．周囲に圧倒され，言葉が通じずみじめな思いもしたが，国内の学会では味わえない貴重な経験を積む事ができた．次回参加できる機会があれば，発表だけではなく研究に対する意見交換もできるようになりたい．そして国際会議参加にあたり支えて頂いた周囲の方々に感謝し，この貴重な経験を活かし今後の研究活動に繋げていきたいと考える．

引用文献

Chen JY(2011) .Problem-based learning：developing resilience in nursing students. *The Kaohsiung Journal of Medical Sciences*, 27(6), 230-233

川上あずさ，池 友美，藤岡敦子，番所道代，上田美歌（2011）．看護学科学生のレジリエンスの変化．兵庫大学論集，（16），39-44.

小林久子，松井幸子，渡邉清江，駒井幸子（2012）．成人看護学急性期実習における看護学生のレジリアンスに関する研究．インターナショナル Nursing Care Research，11(3)，143-149.

中島義明，繁枡算男，箱田裕司（2005）新・心理学の基礎知識，有斐閣ブックス，東京.

NET 2015 Conference for healthcare education. http://www.jillrogersassociates.co.uk/net-conference-home.html　2014-12-08.

齋藤雅子（2012）．学年別看護学生のレジリエンスに関する横断的研究　ソーシャルサポート，自己効力感，社会性に注目して．日本看護学会論文集：看護教育，（42），7-9.

Thomas J, Jack BA, Jinks AM(2012). Resilience to care：a systematic review and meta-synthesis of the qualitative literature concerning the experiences of student nurses in adult hospital settings in the UK. *Nurse Education Today*, 32(6), 657-664.

参考文献

Grotberg,E.H.(2003).Resilience for Today：Gaining Strength from Adversity.1—30.Praeger Publishers, United States of America.

鹿野博規（2012）地球の歩き方 ロンドン `12 ～ `13（第 22 版）．430，ダイヤモンドビッグ社，東京.

University of Cambridge. http://www.cam.ac.uk　2014－12－08.